開発教育ニュースレター

ザイール・エンドーショ孤児キャンプにて

大津司郎（神奈川県）

＊ルワンダ難民報告は次頁です。

No. 50

1994.9

開発教育協議会

ルワンダ難民キャンプ報告

私はキャンプの大きさ、そしてその難民の数に圧倒された。

米軍上陸前後のソマリアのモガディシュの暴力的危険性、南部スーダンの苛酷な自然とタフなゲリラ戦、そして内戦により徹底的に破壊されたアンゴラの街々。訪れた時、それぞれに胸を打つものがあったが、しかし今回のルワンダの悲劇は、そのスケールからいって、はるかに厄介な問題を国際社会につきつけている。

冒頭にも触れたが、なんといってもその数の多さだ。近年例を見ない難民の流出である。当初欧米を中心に騒がれていたジェノサイドという犯罪に対する国際社会の追求もひとまずおいておかなければならない程のスケールで、解決すべき問題は差し迫っており、山積みである。食糧補給、水、医療、雨よけのシート、衛生対策、輸送の確保、そして治安の問題等々。個々のＮＧＯの動きは、日本を除いて各国それぞれに活発であるが、しかし国際社会全体としての対応は依然不十分である。問題の解決に対するビジョンそのものが手探り状態であり、未だに確立されてない。

ＵＮＨＣＲは、帰還＝解決と言っているが、それに対する具体的方策（財源＋国際的な枠組づくり）は明確ではない。かつてのカンボジア難民の帰還作戦とは、全く状況は異なる。ザイールのゴマ周辺だけでも120万人、国外に流出した難民の総数は200万を超えると言われている。ルワンダを取りまく環境に、解決のためのこれといった国際的枠組が存在しない現在、解決への道はかなり厳しい。私がインタビューした多くの者たちは、帰ることに対して否定的だ。「怖い」、「殺される」．．．この場合、それを誰かが言わせている（例えば、旧政府軍の脅迫等）といったことは、情報の精度あるいは出所の点などからして、たいして問題ではない。問題なのは、現政権を含めたルワンダの関係者と国連を中心とした国際社会が、帰還と復興に対して、どれだけ真剣に取り組めるかどうかである。

私が訪問したキブンバ難民キャンプは、ニイラコンゴ（3500m）、ミケノ（3500m）、カリシンビ（4500m）といった火山に囲まれた台地の上に位置している。普段は美しいが、本来人の住める所でない火山台地は、今は大量の難民（約30万人）と彼らが建てた小屋で埋め尽くされている。丘を越えてキャンプは広がり、はるかかなたまでうねり、そこかしこからは炊煙があがり、一見のどかに見える。しかし、ぎっしりと人間が密集したキャンプ生活の厳しさは、見掛けののどかさとは裏腹である。難民達が力を合わせて生活しているなどと錯覚してはいけない。そこは、30万人が詰め込まれた生存競争の場にすぎないからだ。女、子ども、老人等の弱者にとって、今日一日を生き延びられるかどうかを常に問われている戦いの場である。助け合いはある。それは、アフリカ社会においては当然だ。しかし、今は、その助け合いをはるかに越える、隣人達との生存競争の中で生きていかなければならない。例えば、一枚の雨よけのシートを手に入れるにも、単に行儀よく並んでいればもらえるというわけではない。奪い取らなければならないのだ。食糧にしても、水にしても、炊事のための薪集めにしても、力なくしてできる仕事ではない。

キャンプは、同じ境遇の、そして中には何人も何十人も殺してきた殺人者もいる、「隣人達」と呼ばれる他人が、嫌でも共存しなければならない修羅場なのだ。したがって、その修羅場に切り込んで行く明確な目的意識と遂行能力のないＮＧＯの参加は無用だ。ＮＧＯも又、戦っているのだ。ルワンダの悲劇は、国際社会とは何かという問いを今鋭く突きつけている。

大津司郎

フリージャーナリスト
８月にザイールのルワンダ難民キャンプを取材
連絡先：〒225　神奈川県横浜市緑区美しが丘
１－１２－１８－３０２
電　話：０４５－９０２－５３４５

ラオス・ベトナムを訪ねて

神奈川県相模原市を中心として活動を続ける“インドシナ難民の明日を考える会”では、今回は夏休みを利用してラオスとベトナムを訪ねることになりました。

村上哲範

10日間という短期間ではあったが、今回はラオスのビエンチャンと、ベトナムのホーチミンを訪ねることができた。いずれもその国最大の都市（規模は大きく異なるが）なのだが、私が受けた印象は全く対称的なものだった。端的にいえば、ビエンチャンは淡い街、ホーチミンは濃い街といったところであろうか。

ビエンチャンはラオス最大といっても、人口は40万人程度のものである。どこに行っても、今まで見てきた他の東南アジアの都市とは違っていて、ギュッとつまった感じがしない。植民地時代をほうふつとさせる街並に、さほど多くもない交通量。道端で遊ぶ子ども達に、談笑しながら働く大人達。客引きの声もほとんど聞こえてこない。観光客である私の目から見ているからか、時間もずっとゆっくり流れているようである。この水彩画のような暖かさは、ラオス人の穏やかでおおらかな人柄を映し出しているようであった。

一方ホーチミンは、ベトナム人の力強さがみなぎり、木炭で描かれたデッサンのような印象の街だった。どこへ行ってもワサワサ、ザワザワといった感じである。交通量も非常に多く、原付バイクの量などは殺人的ともいえる。子どもも大人も、一見のんびりしているようだが、金がありそうな人間（我々も含め）に対する積極性には物凄さがある。それは通りを２－３分も歩けばわかる。市内のいたる所で両手の指に余るくらいのシクロ引きに、次々と声をかけられるからだ。

ビエンチャンもホーチミンも、さまざまなことが対称的であったが、何ともいえない懐かしい気持ちにさせる点は共通していた。それは我々が持っている（と思っている）が普段は忘れているものをありありと見せてくれるからだろう。また訪ねるときにも、変わらぬものを見せてほしいと思わずにはいられない、気持ちのいい街だった。

＊“インドシナ難民の明日を考える会”は、主にインドシナ難民の子ども達に日本語を教える活動をしています。現役の高校生から卒業生を含む一般市民によるＮＧＯです。

田所千春

この国は外からの援助が必要な本当に貧しい国なのだろうか――たった一週間のラオス滞在中に何度も浮かんできた疑問である。市場には物があふれ、外国人である私たちが何ら不都合を感じることなく過ごすことができ、レストランではよく冷えたビールで喉を潤すことができる。そして通りを行く人々ははにかんだ笑顔を見せてくれる。そこにはラオスを援助・被援助の関係国の枠にはめるには大きな抵抗となる「安らぎ」があった。

勿論私たちが接することのできたのは、ラオスのごく一部にしかすぎない。だが一見控え目に見えるものの、彼らには自力で自分たちの最善を見極めた上で行動しようとする姿勢が根底にはあるように思えたのだ。確かに首都ビエンチャンは狭い道、質素な生活、少ない娯楽の小さな街かもしれない。だがこれは、日本人が日本との比較によって持つ感想にしかすぎない。

「この国には足りないものがあります。だからより豊かな生活のために開発を進めましょう」と言ってしまうのは、本当はどちらの側に立った発言なのだろうか。その国に暮らさない外部の人間が触れるべきでない部分があることや、介入してほしくないと望まれる部分があることに気付かない場合もあるのではないかと、メコンのほとりに立つうちに思えてきたのだ。

ラオスという国は――などと言い尽くすのは難しい。当然のことながら、そこには一人一人の人間と、永きに亘る歴史の上に今があるのだから。まず個人と個人の繋がりの上に立って、お互いにできることを手持ちの札の中からさがすべきだと思う。

滞在中、ラオス女性同盟のリーダーの家を訪れた。数年前に来日したこともある彼女の口からは、日本から来ている海外協力団体の日本人スタッフの名前が親しみを込めて、次から次へと出てきたことも付け加えておきたい。

少なくとも今の私にとって、ラオスは日本の開発援助相手国としてではなく、すばらしい旅を与えてくれた人と街の国である。そしてこの国が今後どのように変わっていくのか、その変化を速めるでもなく、押し止めるでもなく、ただ自分なりに受け止めて見てゆきたい。

知り、考え、行動する

『２１世紀の地球社会と開発教育』

第１２回開発教育全国研究集会

第１２回開発教育全国研究集会は、「２１世紀の地球社会と開発教育」をテーマに、８月19日（金）、20日（土）、21日（日）の３日間、東京都新宿区の早稲田大学文学部を会場として開催されました。今年の全国研究集会は、記録的な猛暑・水不足の中、全国から350人を越える参加者が集まり、例年になく大規模で熱い研究集会となりました。

今年は南アフリカで統一選挙が実施され、黒人大統領が誕生しました。「遠い夜明け」が実現したこの南アフリカのように私たちの選択と行動で未来は変っていくはずです。今年の全国研究集会では、開発教育を市民による「未来社会創造運動」であると位置づけ、さまざまな企画を通して開発教育の現状と課題を明らかにするとともに、「私たちのめざす社会」を共に考えることをテーマに開催されました。

もりだくさんのプログラム

今年は３日間と日程に余裕があったため、多くの企画が組まれました。１日目は『「開発教育」ってなんだろう？』をテーマに、アジア保健研修所の池住義憲さんによる講演「開発教育と”南”の視点」が行われました。また、開発教育の手法を頭だけではなく体も使いながら体験する、参加体験型ワークショップが多く設けられました。参加体験型ワークショップは１２企画行われましたが、こうした参加型企画の充実が今年の特徴の一つでした。

２日目は『さまざまな課題を知る』をテーマに、開発教育で取り上げられている様々な課題を知るため、南北問題、環境問題、人権、開発と女性、多文化共生の５つの主要なテーマ別に学習会が設けられました。また、午前中には多くの研究・実践事例が報告され、午後はパネルディスカッション「開発教育の歴史と課題」、特別分科会「開発教育の定義を再考する」が行われました。さらに、新たな試みである「自主ラウンドテーブル」がこの日の夜に行われました。これは研究集会参加者が自らの企画を行なうもので関心を同じにする参加者が集まり、楽しく行われました。

３日目は『いろいろな実践を共に考える』をテーマに、学校や職場、家庭，ＮＧＯなどそれぞれの場で開発教育がどのように試みられているのか、何をすべきかなどが話し合われました。午後のセッションは、今年の研究集会全体のまとめとして２１世紀の社会について、全体で「私たちのめざす社会」はどのようなものかを考えました。

<u>プログラム</u>

８月１９日（金）
16:30～18:00
　講演「開発教育と”南”の視点
　　ーパウロ・フレイレと開発教育」
　講師：池住義憲（アジア保健研修所）
18:30～19:00　開会式
　挨拶：臼井香里（開発教育協議会理事）
19:00～21:00　参加体験型ワークショップ

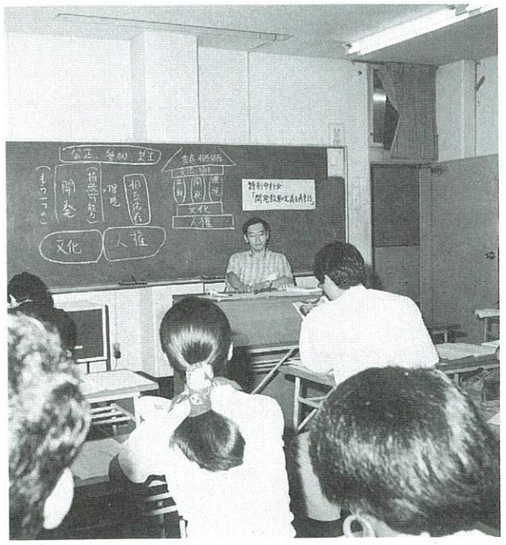
８月２０日（土）
9:30～12:05　研究・実践事例発表
13:00～14:45　ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「開発教育の歴史と課題」
　ﾊﾟﾈﾘｽﾄ：米田伸次（帝塚山学院大学国際理解研究所）
　　大津和子（北海道教育大学）
　　赤石和則（東和大学国際教育研究所）
15:00～18:00 特別分科会「開発教育の定義を再考する」
15:00～18:00　テーマ別学習会
　１．南北問題ー「タイ米」と私たち
　２．地球環境問題と私たちのライフ・スタイル
　３．人権ーアバルトヘイトとは何だったのか
　４．開発と女性
　５．多文化共生
18:00～21:00　交流会
19:00～21:00　自主ラウンドテーブル

８月２１日（日）
9:00～12:00　分科会「開発教育を進めるために」
　１．学校で
　２．中学・高等学校で
　３．職場でできる開発教育
　４．地域・社会教育の場での開発教育
　５．家庭における開発教育
　６．開発教育におけるＮＧＯの役割
　７．スタディ・ツアー再考
13:00～14:30　全体討議「私たちのめざす社会」
14:30～15:00　閉会式
　分科会総括：金谷敏郎（園田学園女子大学）
　挨　　拶　：宮崎幸雄（開発教育協議会代表理事）

興味深い企画のオンパレード

今年はプログラム数自体が多く、たくさんの興味深い企画がありました。

その中でも、昨年に引き続き行われた唯一の企画が２日目午後の特別分科会「開発教育の定義を再考する」です。



特別分科会：開発教育の定義を再考する

ここでは前半に「ﾀﾞｯｶ・ﾄｳ・ﾀﾞﾝﾃﾞｨ」というイギリスの開発教育教材を用いてゲームを行なった後、昨年の議論を踏まえ開発教育をすすめる上で必要となる、その定義について活発な意見の交換がなされました。ちょうど特別分科会の直前に開かれたﾊﾟﾈﾙ・ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「開発教育の歴史と課題」で、開発教育の内容や定義に議論が及んでいたこともあり、パネリストであった大津和子さんも議論に参加され、白熱した議論がなされました。

今年はじめて行われた参加者の自主企画「自主ラウンドテーブル」はゲームを行なうもの、ネットワーク作りを意図するものなど６つの企画が行われました。その時に楽しいというばかりでなく、研究集会終了後にも続く様々なネットワークが作られたようです。自主ラウンドテーブルは交流会の後に行われたため、お酒が入り赤い顔をした人達も参加者となり、和気あいあいと進められていました。

最終日の朝は水不足の東京とは思えない豪雨となり、ＪＲをはじめいくつかの鉄道がとまったため、約30分程度遅れて始められました。この日の朝の企画は分科会「開発教育をすすめるために」でした。そこでは小学校や中学・高等学校、職場、地域・社会教育、家庭、ＮＧＯのそれぞれの場での開発教育の進める方策について議論されました。また、スタディツアーの功罪とあるべき姿についての議論も行われました。

100年後から現在を考えた全体討議

以上の企画を始め、多くのプログラムの総括として、研究集会最後の企画である全体討議「私たちのめざす社会」が行われました。ここでは100年後の社会にワープ（したと想像）し、未来はどのような社会になるのか、私たちはどのような社会をめざすのかが話し合われました。

参加者全体が２０のグループに分かれ、それぞれが選んだ９つのテーマ（生産・消費や民族・国家、環境、家族など）について現在

の課題を議論し、その後で2094年にワープし、100年前のご先祖様（私たち）に向かって自分達がどのような社会に暮らし、それぞれの問題がどのように解決されているかを伝えるというゲームを行ないました。

ここで書かれた2094年からの手紙によると、100年後の社会では人種や民族に対する差別や偏見がなくなり、国家という概念もなくなっているそうです。生産面では完全リサイクルシステムが完成し、例えば食べれる食器の開発などゴミとなるものは何もなくなっています。また医学の進歩により、男性でも出産ができるようになった結果、社会的にも性差がなくなっているそうです。

このように現在の問題を未来から考えることにより、３日間の研究集会で少々疲れたアタマをリフレッシュし、創造のエネルギーが生み出されたようでした。

全体討議を通して、現実の中で見えなくなりがちな「めざそうとする社会」を再考し、具体的にイメージ化することで、「２１世紀の地球社会」に向けて開発教育が行なうべき役割について参加者一人一人が考えるきっかけが与えられたようでした。

参加者からの感想

最後に参加者から多くの感想をいただきましたのでその中からいくつかをご紹介します。

（参加者のタイプ）

350人をこえる参加者中、アンケートには約70人がご協力してくださり、このうち55名が初参加で最も多く、その他の方も参加が2～3回目がほとんどでした。比較的若い参加者が多く見られ、特に学生の方の参加が多いのも今年の特徴かもしれません。

（研究集会全体に対する感想）

・いろいろな分野の人と出会えて刺激を受けた、元気が出た
・雰囲気が暖かく、馴染みやすかった
・新しい発見、知識の広がりがあった
・単なる知識のインプットではなく、考える場があったことがよかった
・内容的に非常にバラエティに富んでいた
・参加したい分科会が同じ時間に重複していて選ぶのに迷う場合があった
・各分科会のコーディネーターの準備状況、力量などにばらつきがあった

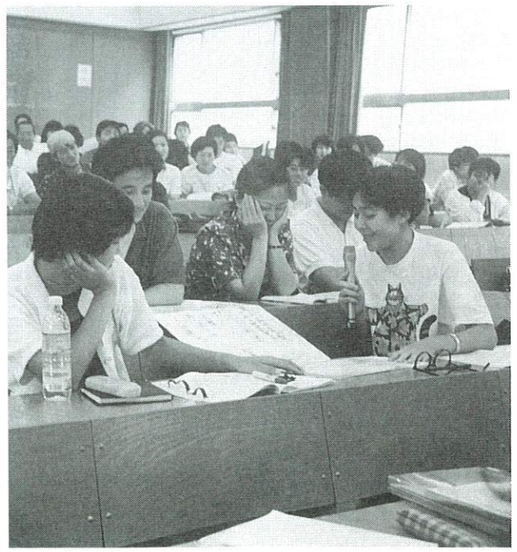
などの感想がありました。また時間的な余裕がなく十分話し合えなかったなどの感想もみられました。

（意見、要望）

・もっと参加型にして欲しい
・研究集会の運営に対して、グループワークや意見の引き出し方、シェアリング等についてもう少し意識、努力して欲しい
・交流会の食器は使い捨てでない方がよい
・年１回ではせっかく盛り上がったものが次の年までもたないので、参加者の交流を継続し開発教育の実践を支援する必要がある

など、様々な意見がありました。こうした感想、要望をもとにまた来年はより充実した全国研究集会になると思います。

なお研究集会の詳しい内容については次号の機関誌「開発教育」でお知らせ致しますので、期待してお待ち下さい。



全体討論:「私たちのめざす社会」を発表する参加者

国際理解教育教材の紹介

「とびだそう！世界へ － アジアの仲間たち」

この教材をまず手に取ってみたときに浮かんでくるのは、この絵日記が教室などで子どもたちに初めて紹介されたときに、色彩豊かな絵と、絵の下にあるアジア各国の文字に見入る子どもたちの輝いている顔だ。

４９枚の絵日記から成るこの教材は、1990年の国際識字年を記念して始めた「アジア子どもアートフェスティバル」という絵日記コンテストでの出品作品だ。コンテストのテーマは「私の生活」。バングラデシュ、中国、インド、韓国、マレーシア、タイ、日本、これら７か国からの子どもたちが、自分の視点からみる自分の身近な生活を７枚づつ紹介してくれている。日本ユネスコ協会連盟が教材に仕上げた。

そのうちの一枚の絵にバングラデシュ人民共和国、ダッカに住む６才の男の子、アシムくんが描いた、部屋で食事の準備をしている場面がある。裏面には、この絵に関するさまざま情報が印刷されている。まず、日記の和訳として「ぼくは、お母さんがだいどころでごはんのよういをしている時に、この絵をかきました。」とある。また、中央には同じ絵が印刷され、絵についての解説としてあらゆる質問に対応できるように必要な情報が詳しく印刷されている。ここでは、例えば、部屋については、バングラデシュでは窓に格子がついていること、床についての説明、粘土のかまどについて、また、お母さんについての質問には、腕輪について、固定式の調理用ナイフとその使用法について、服装はサリーと呼ぶこと、など１２もの質問についての解説が用意されている。その他には、国名、通し番号、テーマ、作者の名前、住んでいる所、日記の英訳も印刷されている。教材セットには、49枚の絵日記（サイズ：縦50cm、横36cm）の他に、教師のための手引き書１冊と、アジアの地図（作者の住んでいる所の位置と首都の位置がわかるようになっている）が用意されている。

教師の手引きには、８人の先生方による実践例が掲載されており、この教材を活用するにあたっての参考としても興味深い。その中で、絵日記を見てのある生徒の感想文がある。「ほかの国々の服装は、日本と全然ちがったり、食べ物や小さいころからの習慣など、身近なものにでも国によって違うことがよくわかりました。・・・」「発見したり、感じたり、思ったことが、素直に書いてあって読んでいておもしろくなりました。・・・」。文化や習慣による違いを乗り越えて、自分と同じくらいの年齢の友達が描いた絵によって、想像したり、観察して心を通い合わせ、どこかで共感しようとする子どもたちの自由な感性が感じられる。ここでは、知識はそのための手段にすぎず、正解や解答といったものを越えた、無限大の世界が広がっている。きっと、この教材を活用する先生方がなにがしかの手ごたえを感じられるのではないかという気がする。

I drew this picture of my mother while she was preparing a meal in our kitchen.

この教材が、相手の生活を知ることによって近いのに遠い存在で、あまりよく知られていない「アジア」に興味を持つきっかけとなれば嬉しい。それぞれの国に文化、遊び、伝統や衣食住といったことがあり、子どもたちの視点からみた普段の生活のありのままを知ってほしい、とはこの教材の制作側の弁である。教材制作にあたって多くの協力者による手作りの教材であるため、一人でも多くの方たちに活用してほしい、そしてほかの活用方法があれば、是非情報を寄せてほしいとのことだ。この自由で広がりを持つ教材が多くの人に愛されることを願ってやまない。

連絡先：開発教育協議会
TEL:03-3207-8085

定価：¥20,600（税込み）送料別

＝開発教育座談会『開発教育の教材を考える』シリーズを振り返って＝

「開発教育って奴を気兼ねなくおしゃべりできて、勉強なんかもできたらいいな。」
そんな素朴な動機で『開発教育座談会』は始まりました。発題者を迎えてのワークショップを中心に、時には開発教育を進める団体に出張なんかもしたりしました。その運営は全くのボランティア。会の存続に不安を覚える声を横目に、ほぼ一月に一回というペースでやり続け、ついに今年の４月には、なんと10回を数えることになったのです。さすがに回数が二桁になると、「軌道に乗ったなぁ」という感慨を覚える一方、運営スタッフの間に「もう逃げられないぞ～」ときさやく強迫観念という名の霊が見えたなどという話もチラホラ・・・。

その４月の座談会も終わって、座談会の５月以降の内容を考える会議の際、座談会のスタッフは考えあぐねました。次に、誰を呼んでどんな話をして頂こうか。それとも違う展開をして行こうか。う～ん・・・。そんな時、

「“知る”だけじゃつまらない。今度は外に向かって発信するんだ。教材づくりを視野にいれた座談会をやろう！」

という天の声があったかどうかは定かではありませんが、検討の結果、５、６、７月は『開発教育の教材を考える』シリーズとして座談会を行うことに決定しました。巷では、この夏の開発教育全国研究集会で、座談会としての発表の場を持ちたいというもくろみがあって、全国研究集会に向かう形で、教材シリーズを計画した、という噂もあるとかないとか。

それでは以下、『開発教育の教材を考える』シリーズのそれぞれの回を振り返ります。

【５/18「ワークショップ入門」山西優二さん（開発教育協議会）】

日本の開発教育の流れといったところからの話が印象的でした。近年の開発教育の傾向としてのワークショップそして教材作成。開発教育の方法論の発展は歓迎すべきだけれども、「目標→内容→方法」を踏まえた形での教材づくりを考えるべきと提言していました。また、お話の中で、開発教育のアプローチとして「異文化理解」と「問題・課題追求」といった二つのものがあり、初めの段階では「異文化理解」のアプローチが重要であるとも言っていました。個人的ではありますが、「異文化理解」を開発教育として、どう位置づけていいのかと考えていた私には、たいへん為になりました。その日は、足元に落ちたウロコを拾って帰るのでした。

【６/16「開発教育と教材づくり」重田康博さん（(財)国際協力推進協会）】

資料が多く、事前にずいぶん準備してくれたんだなぁと感謝の気持ちでいっぱいになったのを覚えています。国際協力推進協会作成のできたてほやほやのビデオ教材『アフリカ大好き！』を通して、教材についてかなり広く話してもらいました。教材を作っていく過程のたいへんさにびっくりしたり、また教材の歴史を紹介してもらった時には、欧米の進んだ状況に日本との差を感じ、考えさせられたりしました。どんな種類の教材があってどこで手に入るといった実際的な情報は、現場を持っている方には有効だったのではないでしょうか。「教材は材料」であると言っていた重田さん。今度は、イギリスでの経験を私たちに話して下さい。向こうでの健闘を祈っています。

【７/２「学校における開発教育」臼井香里さん（開発教育を考える会）】

臼井さんは、協力隊のＯＧで中学校の教員をしています。当日は、開発教育を考える会作成のスライド教材『地球の仲間たち』と中学校での実践のお話を中心に進みました。臼井さん曰く「開発問題をいきなり目の前に置くのではなく」、中学生には、まず「そこに生きている人間の生活があるんだと認識させるのが大事」なんだ。その意味で「『地球の仲間たち』は開発教育の入門編」だと位置づけていました。特に、教材は「素材」であり、「料理する人の味つけが重要である」という話は、パワーと優しさと経験を兼ね備える臼井さんの人柄が、私を「うん、うん。」と納得させたのでした。

以上３人の方からお話頂きました。この中から共通の認識として、２つの点が挙げられると思います。

Ⅰ．教材は素材、材料である→ワークショップや授業を実際にやる人が大きな要素
Ⅱ．教材作成には目的、内容、対象とする層をまず、検討することが必要

今後も私たちは、『開発教育座談会』が開発教育とみなさんの接点になればいいなと考えています。また９月からも座談会を行う予定です。ちょっとでも、面白そうだなと思ったあなた。のぞいてみて下さい。みなさんの参加を心からお待ちしています。日程等に関しましては下記の案内を参照して下さい。なお、お問い合わせは開発教育協議会までお願いします。

報告を終えるにあたり、参考までにこれまでの座談会開催一覧を掲載します。発題者の方を始め、開催場所を提供して下さった東京ＹＭＣＡ国際奉仕センターさん等、座談会に協力して下さったみなさんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

以上文責：開発教育座談会運営委員 伊勢崎 功

開発教育座談会の開催一覧

第１回 日時 ── ５月２８日（金）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 好光 紀（日本ユニセフ協会）
テーマ ─「ユニセフと開発教育」

第２回 日時 ── ６月２２日（火）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 上条直美（東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター）
テーマ ─「開発教育と環境教育の接点」

第３回 日時 ── ７月７日（金）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 木下理仁（神奈川県国際交流協会）
テーマ ─「開発教育ってなんだろう」

第４回 日時 ── ９月１６日（木）19:00~21:00
場所 ── 日本ユネスコ協会連盟事務局
発題者 ─ 寺尾明人（日本ユネスコ協会連盟事務局）
テーマ ─「ユネスコと開発教育」

第５回 日時 ─ １０月１４日（木）19:00~21:00
場所 ── ＹＭＣＡ同盟会館会議室
発題者 ─ 川口善行（シャプラニール・市民による海外協力の会）
テーマ ─「ＮＧＯから見た開発教育の現場」

第６回 日時 ─ １１月１１日（木）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ ＪＡＭＥＳ Ｎ．ＢＲＯＷＮ（東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター）
テーマ ─「ＹＭＣＡの環境教育プログラムの実践」

第７回 日時 ─ １月１９日（水）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 滝川 望（キープ協会）
テーマ ─「開発教育と環境教育の融合プログラム」

第８回 日時 ── ２月２５日（金）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 米山敏裕（開発教育協議会運営委員）
テーマ ─「カナダにおける環境教育と開発教育の一例の紹介」

第９回 日時 ── ３月１７日（木）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 米山敏裕・兼田早智子（開発教育協議会運営委員）
テーマ ─「協力・援助・協賛」

第10回 日時 ── ４月２０日（水）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 米山敏裕（開発教育協議会運営委員）
テーマ ─「自己開発－自分の育ちを見つけます」

第11回 日時 ── ５月１８日（水）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 山西優二（開発教育協議会運営委員）
テーマ ─「ワークショップ入門」

第12回 日時 ── ６月１６日（木）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 重田康博（財団法人国際協力推進協会）
テーマ ─「開発教育と教材づくり」

第13回 日時 ── ７月 ２日（土）19:00~21:00
場所 ── 東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
発題者 ─ 臼井香里（開発教育を考える会）
テーマ ─「学校における開発教育」

《開発教育座談会のお知らせ》

九月二十二日「移民・移住と多民族社会」開発教育座談会教材チーム
十月十九日「アジアにおけるＮＧＯ活動から学ぶ」赤石和則さん（東和大学国際教育研究所）
十一月二十四日 教材「飛びだそう！世界へ アジアの仲間たち」川上千春さん（(社)日本ユネスコ協会連盟）
※すべて 会場・東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
時間・十九時から二十一時

以上一覧まとめ：開発教育座談会運営委員 木内 圭一

シーズン到来　勉強会・楽しいイベント情報が盛り沢山

Event Memo

秋！ 学び、遊び、楽しもう

名古屋国際センター10年祭

㈶名古屋国際センターは1984年10月13日にオープンして以来、今年で10年目を迎える。これを記念して、10月6日から11月3日まで名古屋国際会議場をメイン会場に、多彩なイベントを繰り広げる。

前夜祭
■10月　6日　歴代なごや民間大使とともに

記念講演会
■10月　7日　司馬遼太郎さん
■10月30日　黒柳徹子さん

音楽から世界を知ろう
■10月　8日　ディアマンテス・コンサート
■10月　9日　コーラス世界の旅

はじめよう、私たちの国際交流
■10月　8日　国際化フォーラム
■10月8日・9日　国際交流フェスタ

その他、国際家族年を記念した世界の家族の写真展示や、外国人の芸術作品展がある。
詳しい時間・会場・参加費などは名古屋国際センターへ
問合せ　☎052－581－5691

国際理解公開講座

「ポスト冷戦の国際社会と国際理解」

国家や民族を超えて、人類に寛容と共生の哲学が求められる現代社会。この講座では、国際的動向の理解を中心に、グローバルな視点に立ったポスト冷戦の現実を見据えた国際理解、さらに今後の私たちのあり方について考える機会を与えてくれる。

■10月15日
「ポスト冷戦と国際関係－岐路に立つ日本」　木戸　翁氏
■10月29日
「国際開発の課題－貧困・参加・女性を中心にして」　長峯晴夫氏
■11月　5日
「異なる民族・宗教・文化・体制の共存をさぐる」　内藤正典氏
■11月19日
「世界新秩序と共生を考える－身近な他者との理解と調和を中心として」　栗本一男氏
■「国民的自覚と国際理解」　川端末人氏

と　き　上記毎回土曜日　14:00～16:00
ところ　大阪YMCA会館（地下鉄四ツ橋線・肥後橋下車徒歩7分）
定　員　50名
参加費　5回通し4000円
　　1回のみ1000円
主　催　帝塚山学院大学国際理解研究所
問合せ　☎0723－65－8276
　　内線497

第三世界理解講座

JVC学校開校

日本国際ボランティアセンター（JVC）が、10月よりJVC学校を開校する。
アジア・アフリカ・中南米と私たちの生活がどのように結びついているのか、さまざまな角度から取り上げ、実感し、参加者と共に新しい生き方を探っていこうとする試み。
10月21日（金）は18:00より早稲田奉仕園にて開校式がある。

■Aクラス：巨大開発に揺れるアジア
開発や援助を通して私たちが関わっているアジアの問題を知り、共に考える。メコン開発、中国、ラオス、タイ、ベトナム、カンボジアなどの開発をテーマに全7回。

と　き　1994年11月11日～
　　1995年3月3日　18:30～20:30
ところ　早稲田奉仕園セミナーハウス101号

■Bクラス：人と環境を食べる台所
私たちが日ごろ何気なく飲んでいるコーヒー、食べている肉、捨てているゴミ、それらの背後にあるアジア・アフリカ・中南米の人々の暮らしに出会う。テーマはゴミ、コーヒー、洗剤、調味料や香辛料、そして肉や魚などをめぐる状況について、全7回。

と　き　1994年11月4日～
　　1995年2月24日　18:30～20:30
ところ　台東区松ケ谷福祉会館

定　員　各講座共30名
費　用　各講座共に7回通しで
　　一般：12000円
　　JVC会員：11000円
　　1回ごと：2000円
問合せ　☎03－3834－2388
　　担当：柴田、石丸、望月

国際理解を深めるための

開発教育推進セミナー

今年で6年目を迎えた国際理解推進セミナー。今年のプログラムは残すところあと2回。毎回、開発教育の「入門講座」にとどまらず、歴史的な洞察を加えたワークショップを実施。開発教育の独自の営みである「教える者の自らの検討を通して、いかに課題を子どもたちに引き寄せていくか」、そして「共に学ぶこと」について、あらためて体験学習してみたい。

■第5回「国家と民衆」
　　～インドネシアの開発
と　き　10月15日（土）～16日（日）1泊2日
■第6回「国連・PKO・累積債務」
　　～ソマリア
と　き　12月10日（土）～11日（日）1泊2日
＊いずれも
ところ　関西セミナーハウス
　　（京都市左京区一乗寺竹の内町）
対　象　開発教育に関心のある人
参加費　1回9000円
　　（食事・宿泊・資料代含む）
　　1日参加者3000円
問合せ　☎075－711－2115

子どもの権利条約 フォーラム'94

子どもの権利条約の実効的な批准と実施をめざして、全国の団体、グループ、個人の方たちとの情報、意見交換を行なう。子どもの問題や条約に関心のある方は、ぜひ参加を！
10月16日は、「子どもと学校」をテーマにプレフォーラムがある。

と　き　11月5日（土）13:30～
　　・6日（日）10:00～
ところ　国立オリンピック記念青少年総合センター（東京・代々木）
主　催　子どもの権利条約フォーラム実行委員会
問合せ　☎03－3433－7990
　　（子どもの権利条約ネットワーク）
　　☎06－375－5466
　　（国際子ども権利センター）

アジア保健研修所オープンハウス

出会いははじまり 思いっきりアジア!!

草の根のアジアに出会える楽しいお祭り。AHI（アジア保健研修所）の敷地を使ったいろいろな催しが待っている。「味」わって、「手」にとって、「話」をして、体験する秋の一日。
リサイクルや手作り品のバザー、アジアの料理体験、AHIの研修生たちとの交流、民芸品販売など、アットホームな企画を通してアジアの仲間同士で楽しもう。
ボランティアも募集中！

と　き　10月10日（月・祝日）
ところ　アジア保健研修所
　　（愛知郡日進町米野木南山987-30）
問合せ　☎05617－3－1950

世界食料デー

「あなたと世界の見えないつながり」

と　き　10月17日（金）～22日（日）
問合せ　☎03－3238－3838
（上智大学人間学研究室世界食料デーグループ）

Communication

理事会・運営委員会の記録

第68回理事会　8月21日
・会員、会計等状況報告
・各種事業の進捗状況報告（地域セミナー、カタログ、ワークショップ、スタディツアー、その他）
・顧問の選出について――関係者外部の方も対象とする、任期2年、再任は妨げない。
・開発教育研究会――ガイドラインの明確化のため検討中
　次回は10月28日（金）の予定

第72回運営委員会　7月20日
・会員拡大キャンペーン、地域セミナーの進捗状況の報告
・国際協力フェスティバルの出展、イベントについての協議
・全国研究集会の運営に関する協議と確認
　次回は9月13日（火）全研反省会も行なう。

開発教育の推進活動にご支援を！

開発教育は、老若男女あらゆる立場の人が、よりよい地球社会を実現するために、地球上で起こっているさまざまな問題を知り、解決のために私たちに何ができるのかを考え、行動するための活動です。
そのための推進・普及活動を、今後もさらに広げていくためには、皆さんの多方面からのご協力と、持続的な資金が必要となります。
開発教育は海外への直接援助活動ではないため、なかなか理解を得にくいというのが現状ですが、

■身近な場での開発教育の普及
■情報交流へのご協力
■新規会員の拡大
■会員の継続加入
■賛助金へのご協力　を今後もよろしくお願いいたします。

■協議会事業へのボランティアスタッフとしての参加
■協議会のパンフレットやニュースレターの常置
にご協力いただける場合は事務局へご一報ください。

開発教育協議会は10月より

開発教育入門講座を実施いたします。

「開発教育って何？」という方に、開発教育の歴史的変遷や概要を、わかりやすく、おもしろく講義いたします。ついでにワークショップを体験し、開発教育を身体で理解してみませんか。
もちろん誰でも参加できます。

《第1回》
日時：1994年10月13日（木）
　　19：00～21：00
講師：米山敏裕（開発教育協議会）
《第2回》
日時：1994年11月16日（水）
　　19：00～21：00
講師：山西優二（開発教育協議会）
＊すべて会場は開発教育協議会事務局
　　新宿区西早稲田2-3-18-61
　　日本キリスト教会館6階奥
＊参加申し込みは事務局へ ☎03-3207-8085

Membership

新会員

滝川　望（神奈川）紀本栄一（大阪）長倉徳生（東京）岡崎文香（東京）針生則子（群馬）三谷佐恵子（東京）
木崎めぐみ（愛知）村岡　章（山口）藤井彰子（東京）満川尚美（東京）真嶋克成（大阪）土井高徳（福岡）
桜井高志（東京）秋山範子（兵庫）アーユス＝仏教国際協力ネットワーク（東京）加藤雅子（東京）
服部篤子（大阪）羽山信輝（栃木）遊佐麻里子（東京）有泉はるひ（東京）稲田和永（大阪）羽渕強一（兵庫）
相馬克行（東京）鈴木おり恵（愛知）林　浩二（千葉）若葉俊文（埼玉）門倉俊雄（神奈川）越川鈴子（神奈川）
吉中麻樹（東京）坂井正子（東京）杉浦和義（千葉）長村嘉浩（東京）渡辺静雄（東京）池田雅江（東京）
河島　清（埼玉）荒井謙一（千葉）大形いずみ（東京）筧　奈雅子（東京）加藤京子（茨城）飯塚紀子（神奈川）
阿部則子（東京）菅井　智（東京）羽佐田透一（愛知）長野とも子（岩手）井爪明佳（愛知）丸岡匡孝（兵庫）
川崎　功（滋賀）名古屋国際センター（名古屋）松本芳子（島根）

継続会員

金沢はるえ（埼玉）小松原美栄子（東京）神戸YMCA（兵庫）徳永由美子（奈良）野元弘幸（埼玉）
太田　弘（U.S.A.）松村由美子（大阪）坂井俊樹（東京）坂野幸(U.S.A.)旦　節子（東京）能仁宏樹（三重）
竹内啓二（千葉）橋詰袈裟則（神奈川）国生美奈子（千葉）柴田栄子（埼玉）林　立彦（神奈川）
藤村コノヱ（神奈川）中西珠子（東京）岡田純爾（岡山）平野芳裕（東京）栗野　鳳（東京）古賀黎子（福岡）
高野彰夫（千葉）高嶋起代子（福井）寺村　睦（東京）徳山　薫（東京）浅沼早苗（神奈川）渕辺真美（神奈川）
高橋　輝（東京）杉原輝明（京都）杉山尚子（東京）石井由理(U.K.)森山泰準（神奈川）三村和久（山口）
照屋康子（東京）細田美香（東京）松本一子（愛知）鍋倉伸子（静岡）小貫　仁（埼玉）白井香里（神奈川）
荒木重雄（東京）日本フォスタープラン協会（東京）河内徳子（埼玉）富　安正（千葉）久保田真弓（大阪）
三代孝博（東京）原　庸子（東京）杉浦正和（千葉）重田康博（東京）斉藤千佳（東京）上条直美（神奈川）
中村貴子（神奈川）協力隊を育てる会（東京）中里亜夫（福岡）石田伸子（東京）高崎小枝子（東京）
牧野和幸（神奈川）水野直美（東京）名古屋YMCA（愛知）渡辺能理夫（東京）星野亜紀子（神奈川）
本橋　栄（東京）

賛助会員

吉村慶一（神奈川）山西優二（東京）米山敏裕（東京）小松原美栄子（東京）安達志津子（東京）
大津和子（北海道）宮崎幸雄（東京）松尾光雄（大阪）岩切正芥（神奈川）

会員のみなさん
これからも
よろしく!!

何れも94年6月～9月5日受付分，敬称略，受付順

国際協力フェスティバル'94

今年、開発教育協議会は国際協力フェスティバルの共催団体。イベントとして、フォスタープラン、ハンガープロジェクトと合同で、**日比谷公園特設ステージにて「地球家族フォーラム」**を開催。

その他にも、NGOの代表者、青年海外協力隊OB、ジャーナリストなどによるパネル・ディスカッション「トークYOU」、民族音楽「LIVE ON EARTH」、国際協力について学ぶ「国際協力ゾーン」など、今年も盛り沢山のイベントが繰り広げられる。

と　き　9月30日（金）プレオープン
　　10月1日（土）・2日（日）
ところ　日比谷公園・日比谷公会堂
参加費　無料
主　催　国際協力フェスティバル実行委員会
共　催　国際協力事業団、海外経済協力基金、国際協力推進協会、NGO活動推進センター、開発教育協議会、国際開発学界
問合せ　☎03－3586－5171

歩く大地はひとつの地球

アースウォーク湘南'94

「歩く」ことで国際協力に参加し、国際協力について考えようという催し。今年で8回目を迎える。

参加者はそれぞれ、事前に家族や友人などにスポンサーになってもらい、1区画歩くごとに何円かの寄付の約束をしておき、イベント終了後、寄付金を実行委員会に送る。集まったお金は、日本国際ボランティアセンター、サヘルの会、パグアーライ・ナン・ブソ基金、タイ国障害児のための財団横浜連絡事務所の4つのNGOに寄付される。

ゴール地点となる江ノ島のかながわ女性センターでは、NGOの紹介ブースのほか、コンサートやフリーマーケット、子どもを対象とした国際理解のためのプログラムも実施される。

と　き　11月6日（日）　10:00～16:00
　　雨天決行
ところ　鎌倉→江ノ島（藤沢）
　　スタート：鎌倉市役所
　　ゴ　ー　ル：かながわ女性センター
問合せ　☎045－671－7082
　　（JVC神奈川）

やまがたグローバルセミナー

体験学習を通して人づくり、地域づくりを考えようという催し。「環境」「人権」「異文化理解」などをテーマにさまざまなワークショップが行なわれる。

と　き　12月10日・11日
ところ　山形県青年の家（天童市）
定　員　120名
参加費　3000円（食事代を含む）
問合せ　☎0236－24－0043
　　（山形県国際交流協会）

シンポジウム

「どうなるカンボジア　復興のこの1年」

さまざまな角度からカンボジアの問題を検証し、考えるシンポジウム。「カンボジア新世代の声」を聞くほか、NGOスタッフ、研究者、ジャーナリストらによる報告が行なわれる。

と　き　9月23日（金）　13:30～17:00
ところ　全水道会館（東京・JR水道橋）
参加費　1000円
問合せ　☎03－3834－2407
　　（カンボジア市民フォーラム）

シンポジウム

「侵されるサラワク熱帯林の先住民族と日本人の責任」

日本が最も多く熱帯財を輸入している、マレーシア・サラワク州の現状を知り、我々の責任について考える。

と　き　10月2日（日）
ところ　カンダパンセ（東京・JR水道橋）
参加費　1000円
問合せ　☎03－3378－1991
　　（サラワク・キャンペーン委員会）

1995年カレンダー

㈶ケア・ジャパンでは、タイの伝統技術の育成援助を目的として、来年のカレンダーを販売している。売り上げは、とくに桑畑の灌漑設置とその関係費用に充てられる。

カレンダーは、途上国の子どもの写真が中心で、1994年9月～1995年12月の16カ月分、英語及びスペイン語表示、サイズは46cm×28cm。1部1200円。

問合せ　☎03－5950－1335
　　（ケア・ジャパン／カレンダー係）

秋のまつり

バザール・ベンガル

青山で知る海外協力

南アジアの生活や文化に触れながら、海外協力について考えようという催し。

会場ではバングラデシュの市場が再現され、バングラの遊びに参加したり、サリーの着付けも体験できる。他にも識字模擬授業、ベンガル語講座やコンサートとたくさんの企画が目白押し。

と　き　10月15日（土）11:00～18:00
　　16日（日）10:00～17:00
ところ　青山梅窓院（港区外苑前）
問合せ　☎03－3202－7663
　　（シャプラニール＝市民による海外協力の会）

子どものための

ディープエコロジー・ワークショップ

子どものためのワークショップ。何が待っているか、お楽しみに！

と　き　10月22（土）・23日（日）
ところ　みどりセンター（東京都小金井市）
参加費　未定
主　催　ウェッブ・オブ・ライフ
問合せ　☎0424－85－2843
　　（担当：鎌田）

グローバルスタディセミナー

「人権」って何？パートⅡ

女性、子ども、そして命

「人権」とは、どんなことで、その意味や問題に目を向ける3回連続のセミナー。

第1回「女性と世界」（9月18日）
日本で働く外国人女性の人権侵害
第2回「子どもと世界」
ケニアの子どもの状況報告から
と　き　10月16日（日）13:30～15:30
スピーカー　山崎　城之さん（アフリカ救援ボランティアグループ・ミコノTAC）
第3回「人権と世界」
死刑廃止の視点から見た人権問題
と　き　11月27日（日）13:30～15:30
スピーカー　岩井　信さん（アムネスティ・インターナショナル日本支部事務局）
＊以上すべて＊
ところ　宇都宮市総合コミュニティセンター（JR宇都宮駅より車で約20分）
対　象　高校生、社会人
費　用　1回800円
主　催　㈶とちぎYMCA
問合せ　☎0286－24－2546

あなたも**会員**として**開発教育協議会**に
参加しませんか

「開発教育協議会」は、開発教育の推進に関心をもつ団体、個人であればどなたでも入会することができます。
☞会員の方には、
○研究誌『開発教育』（年3回）の送付
○ニュースレター（年6回）の送付
○他NGOを含め、各種催しの案内
○国内外諸団体からの情報・資料の提供
○出版物、催しの参加費等の会員割引
などのサービスがあります。
＊まずは事務局へお問合せください。

※　読者の皆さんからの情報をお待ちしています。締切りは偶数月の15日。協議会事務局（ニュースレター係）宛にお送りください。

編集室から・・・

■今年の夏の全国研究集会は、これまでで最高の350名を超える参加者が集い、たいへん賑やかなものになりました。

■今回、初めて2泊3日で実施し、プログラムのボリュームは2倍になりました。また、さまざまな参加・体験型ワークショップの紹介や、自主ラウンドテーブルなど、新しい試みがいずれも好評で、会場にはいつも活気があふれていました。

■参加者のアンケートのなかに、「来年は東京以外の場所で」という声がありました。自然の豊かな場所で、ひと味ちがった集会も悪くないと思います。

■どなたか、来年の全国研究集会の実行委員に名のり出てみませんか。30人のボランティアと情熱が集まれば、来年の全国研究集会を、あなたの町で開くことも可能です。（K）

開発教育ニュースレター
隔月刊
1994年9月15日発行
第50号

発　行：開発教育協議会
〒169　東京都新宿区西早稲田2－3－18－61
TEL：03（3207）8085
（10:00～18:00）
FAX：03（3207）0226

お願い：ファックスには必ず「開発教育協議会」と宛名を明記してください。

編　集：ニュースレター編集チーム